

水の守り神

水神社の額

匠 探訪

— 49 —

全国の湖のなかで12番目の面積となる十和田湖（青森・秋田両県にまたがる）に次ぐ大きさだったとされる樺海（つばきのうみ・樺湖）が干拓されたのはおよそ340年前のことです。

干拓工事面積は、江戸時代前期としてわが国最大のものでされ、干拓が済んだ新田が売り出されてから20年、新田18か村が成立したのが1696年（元禄9年）でした。新田村には「3社5か寺」がまつられ、市域には春海村に修福寺（現在は廃寺）と水神社

がまつられました。

水神社の正面に掲げられたスギ材の額には、興味深い「比丘（びく）杉」のことが書かれています。

猿田神社のある椎柴村（銚子市猿田町）に周囲約8メートル、樹齡が千年を越えるという大木があって、比丘杉と呼ばれていました。そのいわれは、「人魚の肉を食べた女が八百歳まで生きた」という全国各地に伝わる「八百比丘尼（やおびくに）」伝説と結びつき、この大杉が八百比丘尼の墓標であったとされたことから比丘杉と呼ばれたと伝わっていました。

この比丘杉が1903年（明治36年）に伐採され、買い取ったのが春海村出身で当時東京で「春海屋」という材木商を営んでいた者で、その木の一部に由緒を書いた額が水神社

に奉納されたものが残っています。この大杉を伐るきっかけは、明治の中ごろ流行していた赤痢やチフスの治療費を生み出すためだったとも伝わっています。

樺海にまつわる巨木伝説は、むかし、樺の大木が枯れその根の跡が湖となり、樺海と呼ばれるようになった、というのが広く知られています。

この伝説はおそらく1670年（寛文10年）から始まった干拓工事が進む中で、樺という地名と合わせるかのようになり、できあがった話のような気がします。

新田18か村の村名には「春海」、「万歳（まんさい）」、「万力」（ともに旭市）、「八重穂」（東庄町）などのようにめでたい名も付けられたことから、も農民の願いが感じられます。

春海の水神社は、江戸時代には「水天宮（すいてんぐう）」と呼ばれ、農業には欠かせぬ水の守り神でした。境内には、1770年代以降に建てられた「大杉大明神」「金比羅大権現」「石尊大権現」「庚申塔」などの石神がまつられ、村びとの心のよりどころだったことが知られます。

■ 八日市場図書館 ☎ 3746

樺海地区春海にある水神社の額

